

太平洋・島サミットでの発表を前に準備する宮古総合実業高校環境班の生徒ら

11日午後、宮古総合実業高校



ソバ栽培で水質保全 宮古総実生が成果発表へ

高校生の環境研究

【宮古島】「宮古島の水を守りたい」という思いから、旧宮古農林高校時代の1997年に発足した宮古総合実業高校環境班。先輩からの研究を引き継ぎ、数々の成果を収めてきた。

平らな宮古島は、川がなく生活用水のほとんど全てを地下水に頼っている。世界でもまれな地下ダムは、水質が汚染すれば回復までに時間がかかるという短所がある。同班は、発足当初から地下水保全と農業の持続発展の両立を追い求めてきた。

同班は、ソバの窒素吸収力が高いことに注目し、サトウキビを収穫した後の畑に植えることで土中の窒素の地下浸透を防ぐ方法を提案した。現金収入が得られ、茎や葉が緑肥にもなるソバは、経済性を保ちながら地下水保全型農業ができるというメリットがある。

同班を指導する前里和洋教諭は「寒い地域の作物というイメージが強く、栽培

は無理だと思った」と振り返る。しかし、名産地の収穫期と気温が同じ春先に種をまくと、驚くほどの速度で成長した。前里教諭は「温度調節をしつかりすれば、

は無理だと思った」と振り返る。しかし、名産地の収穫期と気温が同じ春先に種をまくと、驚くほどの速度で成長した。前里教諭は「温度調節をしつかりすれば、

同市はサモアに対し、これらの技術を移転する「水道事業運営（宮古島モデル）支援協力」を2010年から実施している。専門家として市職員をサモアに派遣し、浄水方法や漏水管理のノウハウを伝授した。

島サミットに参加する南太平洋諸国でも栽培できると思う。台風が巨大化しない分、宮古よりも適しているかもしれない」と話す。

同市はサモアに対し、これらの技術を移転する「水道事業運営（宮古島モデル）支援協力」を2010年から実施している。専門家として市職員をサモアに派遣し、浄水方法や漏水管理のノウハウを伝授した。

サモアで水道事業

宮古島市職員

「生物浄化法」伝授



県経営者協会の視察で、浄水場の現状を説明する宮古島市職員（中央）＝2011年11月、サモア

沖縄発の技術支援

第6回太平洋・島サミットを念頭に、宮古島市などがJICA（国際協力機構）と連携し沖縄の技術力

を生かした事業を大洋州諸国で実施している。宮古島市は大量の薬品を使う急速ろ過の方法ではなく、微生物などの力で水を

3月末に成立した改正沖縄振興特別措置法で、JICAの開発途上地域への協力が明記された。今後さらに支援事業が拡大する見通しだ。

この協力をきっかけに県企業局が大洋州に対し研修を実施しており、来県した研修員に県内各地の水資源管理の技術を教えている。企業局は10年に職員2人をソロモン水道公社に派遣し現地でも支援している。